

## 山いき隊の活動エリア

JR浜松駅から車で北へ1時間ほど進むと、中山間地域の入口に到着。浜松市の面積の3分の2を占める中山間地域は、地域を縦断する天竜川の両岸に険しい山々が連なり、スキやヒノキの人工林が広がるエリア。天竜美林と呼ばれる森でトレッキングしたり、清流・阿多古川や気田川でカヌーやキャニオニングなどをしたり、雄大な自然を満喫するアクティビティが人気です。都会では味わえない豊かな自然に包まれ、歴史ある文化に彩られた暮らしが営まれています。そんな自然豊かな場所が、「山いき隊」の活動するエリアです。



## 浜松市について

静岡県浜松市は日本の真ん中に位置する、人口およそ80万人の政令指定都市です。東京からも大阪からも新幹線を使って約90分。周囲を遠州灘、浜名湖、天竜川、南アルプスの雄大な自然に囲まれた全国2位の広大な市域には、ぎゅっと日本を凝縮したような、多様性のある街並みが広がっています。山と海が近く、都市でありながら田舎暮らしも楽しめる、多彩なライフスタイルを実現できるのが、浜松市の魅力です。

## 浜松市 中山間地域



We are  
Yamaikitai  
Hamamatsu

## 山いき隊とは？

「浜松山里いきき応援隊」(通称、山いき隊)とは、総務省の「地域おこし協力隊」制度等を活用した、本市の中山間地域を支援する制度です。全国の都市部の若者が、浜松市の緑豊かな山里に移住して、地域の人たちと協力しながら地域の魅力向上、活性化につなげる活動をしています。活動内容は、畑仕事やお祭りの手伝い、情報発信のほか、隊員自身の自由な視点や発想に基づく地域資源を活用した交流体験や特産品の開発など多岐にわたります。



田代さんがリノベーションした  
自宅リビング



春野地域 田代起也

石垣のある家を見て、  
ここだ！と

「春野町に移住したいと考えていて、1年近く空き家を探していました。市の移住コネクターの紹介を受け、天竜区内で5軒くらいあった候補の中、石垣の上に乗っているの平屋を見て決めました」

田代起也さんも妻と3人の子どもの共に春野町和泉平に移住してから5カ月（取材当時）が経つ。大学院を卒業後、静岡の自動車部品メーカーで8年、組み立てまでの工程を担当する仕事をしてきたが、昨年会社を退職した。

山いき隊に入ったのは偶然

「夫婦ともに田舎暮らしの夢がありました。仕事はどうしようというより、農業とか出来るかな？という程度。任んだけ何とかなるだろう？（笑）。とりあえず住む場所を見つけた」と

仕事は「の次」というわけではないが、田舎での暮らしを実現することが田代家では最優先でした。当初移住の候補地は山梨県の韮崎市や北杜市だったそう。良い場所ではあったけれど、移住までの決断ができなかったという。東京で仕事をしていた春野町出身の友人が、Uターンで実家の林業を継いだことを年賀状で知る。

「先を越された」と笑うその友人に話を聞きに行ったのが、天竜を知りたから決めて、約1年がかりでこの家を買う目の子どもの妊娠が分かりました。家族

HARUNO  
TATSUYA TASHIRO

PROFILE

田代起也(たしろ たつや)さん 沼津市出身。  
2022年10月から山いき隊に兼任。  
沼津高専・豊橋技術科学大学大学院を卒業後、  
自動車部品メーカーに勤務。



@TAS.LOVE.SOUL.COFFEE

5人揃ってから引越した方が良かったと考え、出産までの間、私入で春野に通いながら購入した家をリノベーションしていました。「浜岡町でリノベーションスクールに参加した経験を生かし、カフェを開業して、いけば、収入は夫婦で計算すれば何とかなるだろう」と考えていた頃、知り合いの山いき隊から、春野で定員を増やすらしいという話が、その後たまたま浜松市担当者の方とも出会って「誰かいない？はい！私」っていう感じで、山いき隊の存在を知っていて興味がありました。募集もしていないし、諦めていたのですが、運命という偶然だろうか」

春野ブランドの  
立ち上げを目指す

「今、天竜区発のクラブレベルを作りたい」と多々あります。春野町のクロモシの作りを付けたビルです。この和泉平にモラセンシャルビルを作っている方がいるのですが、お手伝いをして、いた時、春野の将来について、これからどうしよう？という話をしていたことがきっかけです。中区のクラブビル専門店に相談に行き、第1回はそこからホフなどの原材料を提供していただくことになりました。いっかには地元有志の方の力を借り、春野産物まつを使用したビル作りを目指したいですね。それに付随してくるのですが、大学生や浜松市外の方に、お手伝いとか、農業体験をしてみたい時に民泊ができるように、家の離れをリノベーションします。春野を知ってもらうには、働く場所と同時に泊まる場所を作ることが大事だと考えています。また、軽トラの荷台に居酒作り、移動居酒屋を作るプロジェクトも考えています。できたビルと地元産の食材を使いたまみを提供することもです。広い春野町の各地を訪問して多くの方と交流したいと思います」

春野町の暮らしの魅力

「生活が豊かになりました。ここへ来てからの方が多くの人と出会うようになったり、人と接する事っていいことなんだと思える毎日です。また、お金を出して誇れる

移住を促進するため、  
働く場所と暮らすところを作りたい



のを買わなくても、生活全体のレベルが上がっているように感じるのは、野菜をはじめ食べ物や美味いからでしょうか」

会社員時代は時折「仕事に行きたくない」と口にする日があったそう。妻の萌（めく）さんによると、今は毎日生き生きして、仕事の愚痴などは切言わず、今度はこんな事やりたい、今日は誰と会った、仕事の報告をするらしい。

「この生活手にしていなければ辛かたです。会社員時代は毎日決まった時間に出勤し、同じ人と仕事をし、家に帰って、社宅に住み、またが離れていながら住んでいるのかもしれない。今は会社員時代の倍以上の人と話す機会があり、話していると自分の意見や考えも増えて、人間味を取り戻した気がします。この暮らしと出会わなかったら、十日だけを密かな楽しみに、毎日心を殺していたんではないかと思えます（笑）」

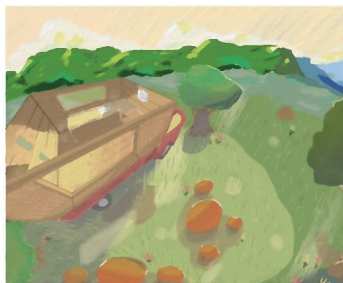
移住者つ山いき隊員の田代さん、同じような思いを持つ人たちに、春野の暮らしを発信する的同时に、働く場所を作りたいたいと思える。今後の活躍も目が離せない。

HARUNO LIFE

秋葉山に登る道中で富士山と春野の山々を望めます。他にも雲海と茶畑が広がる景色を見ることが出来ます。山が多い分、谷もあり、そこには必ず底が見える綺麗な川が流れています。子どもたちは川へ遊びに行き、大人たちはその清流に癒されています。



秋葉山に登る道中で望む富士山



田代さんがイメージしている移動居酒屋のイラスト



天竜区のマルシェで、自らが焙煎したコーヒー豆を販売



由はありません」  
鳥での経験と知識を活かし、引佐地域を盛り上げたい。熱い想いを胸に「山いき隊」での活動が始まった。

まさに失敗は成功のもと  
商品完成まであとわずか

この地域の次郎柿は美味だと言われているが、実は食品ロス問題を抱えている。柿は傷つきやすく腐りやすいため、売りに物にならなくなった柿が数百キロ単位で破棄されているのだ。杉村さんは、これを万能ダレづくりに利用できないかと考えた。

「タレの開発に協力してくれる会社探しに難航し、ようやく耳を傾けてくれる会社が見つかったのですが、その社長さんが以前に柿の万能ダレを作ったことがあり、信じられないほど簡単だったと言っていました。リンやミカンなど酸味の強い果物は相性が良いのですが、甘くて酸味のない柿は

# INASA

TSUYOSHI SUGIMURA

## 「食」を通じて、山と街をつなぐ 架け橋になりたい



**PROFILE**  
杉村剛(すぎむらつよし)さん 浜松市中区出身。  
2022年7月から山いき隊に就任。  
与論島で7年間リゾート観光業に携わる。妻と共に引佐へUターン。現在6カ月の息子と3人で暮らす。

### 引佐地域 杉村剛

海の暮らしから、  
山の暮らしへ  
妻とともに引佐へUターン

浜松でスポーツクラブを運営する企業に勤めていた27歳の時、東京本社への異動が決まった。しかし、現場での仕事が好きな杉村さんは、田舎暮らしを求め退職。与論島へ移住した。

「夫婦揃って田舎が好きで、中山間地域で家を探していました。引佐が気に入って移住を決めた頃、「山いき隊」の存在を知ったのです。一目惚れで引佐で、地域のための仕事ができるなんて、チャレンジしない理由がなかったんです。」

が良いのですが、甘くて酸味のない柿はタレには不向きだと教わったのです」  
しかし次郎柿ではないもの、市販されている柿のタレを徹底的に調べたところ、柿をそのままタレ作りに使ってはいけなく、果実酢にして加えることで、美味しく仕上げられていることが分かった。

「そういえば浜松は餃子の街なのに酢造り会社がなく、酢の土産品もない。もし柿酢が完成したら、万が一作りも可能なので、すべての条件が揃い、心が躍った。現在、商品開発は着々と進んでいる。普段使いにも土産品にもなる、県内外の人々を魅了する商品になれば、柿農家さんは喜んでくれるだろう。」

そしてもう一つは、「山いき隊」の山いき隊さんやサント、3つの意味を掛け合わせたおにぎり、地元のスーパードラッグで開発している。

「中山間地域の中身、魅力を見てもらいたいて、具材が見えるサンドイッチ型にしました。引佐地域と、山いき隊が出店するイベントでの販売を予定しています」  
引佐に人を呼び込むためのツールとして

#### INASA LIFE

街と田舎のバランスが「ちょうどいい」ところ。三過南信自動車道のICがあり、交通の便が良い。そのため、人を集めるのにそう難しくありません。まさに「山と街をつなぐ架け橋」となる可能性を秘めています。そして引佐町は1つの大きな家族のようで、つながりを大切にする温かい人ばかりです。

Hamamatsu YAMAIKI | INASA AREA

「ここでもしか買えないもの」「山いき隊が販売するもの」というプレミア感満載の名物にしたいんです。」  
「パッケージデザインや商品撮影などは、それを得意とする他の隊員の力を借りたいと思っています。総力で作れば、立派な山いき隊ブランドの誕生です。柿酢は、いざサントが店頭で並ぶ日が待ち遠しい。」

**任期終了後は「店舗募集型キッチンカー」で、山の人々の笑顔にした**



例えば農作物を「こ」や「て」で食べると美味しいうちで教えていただくことが多く、その通りにすると本当に美味しい。これ売ったら絶対に売れるのに、なぜか言葉もよく耳にする。売場も場所もなければ、良い、美味しい物を集めて街へ移動販売したとどうだろうか。その逆ももちろん。話題の街グルメを中山間地域で味わうことができたら面白い。さらに山いき隊のイベントに出店すれば、後輩隊員たちの役に立てるだろう。まさに、みんなを幸せにする山のキッチンカーだ。

着任してから、まだ半年の杉村さんだが、任期終了後も大好きな引佐に貢献したいと、プロジェクトは明確で頼もしい。引佐だけでなく中山間地域全体を盛り上げてくれるに違いない。これからの活躍が楽しみだ。

### OB interview

山いき隊OB 小林成彦さんに向きました!



次なる目標はプレイパーク開設  
子育て世代の来村を目指して

小林さんは任期満了後、約1年浜松市内の映像制作会社に勤務。技術を習得した後、兼ねてより関心のある「自然」や「地域」を対象に映像制作をしたいと、すぐに独立を決めた。山で生計を立てていくには、仕事をどう生み出していくかを、常に考えるようになったという。地域の人と会って話し、何が足りないかを正確に掴み、どう伝えたらその地域のためになるか。得意とする「映像」というツールを使い、一つ一つの課題に本気で向き合っている。

休日は、長男と庭で湿地づくり。小さな滝やトンネルを作ったり、生物観察をしたり。そんな小林さんには構想が

**PROFILE** 小林成彦さん 埼玉県所沢市育ち(出身は長野県長野市) 2015年7月~2018年6月、山いき隊として活動中に結婚し長男が誕生。任期終了後も引佐に定住し、2022年に第二子(長女)が誕生。映像制作会社を起業し、引佐暮らしを続けている。



1. 餃子にあり、様々な料理に使えるクセのない万能柿酢と、美容や健康にも最適な飲む柿酢を試作中
2. いなサンドは久留米女性の棚田のお米と地元野菜を使用





子どもたちと始めた畑つくりの様子

### 母親の立場で 山いき隊を発信

天竜区役所がある一帯地域から約10キロのところに、岩六美さんが暮らす竜川地域がある。5歳の娘と3歳の息子の保育園への送り迎え、夫の通勤にも約40分だそう。

「以前は保育園を経由して職場まで行くのに片道1時間以上かかっていたので、それを考えると似たような状況ですから、それほど不便は感じません」

大学を卒業後、市内自動車部品メーカーに4年間の勤務後、バックパッカーで世界中を旅する。夫とはその時に出会った。

「山いき隊のことは以前から知っていて、自然やアウトドアが好きだったこともあり、興味はありました。しかし、結婚出産を経て、仕事と子育ての両立に精一杯の日々を送っていると、そういう気持ちですかり忘れていたのです。ところがコロナ禍にならなくて、限りある人生を好きなことや興味の向く方に進んでいきたいと考えるようになり、思い切って生活を要



## 山間部の人たちに グローバルな経験を

# TENRYU MUTSUMI SHIN



くま水車の里で行われた大衆樹祭をお手伝い

天竜地域  
岩六美



### PROFILE

岩六美(しんむつみ)さん  
浜松市東区出身。  
2022年9月から山いき隊に着任。  
大学を卒業後に4年間市内の自動車メーカー勤務の後、バックパッカーで世界中を旅する。

子どもたちと一緒に味噌づくりを楽しむ一枚



えられないかとあれこれ考える中で、山いき隊の存在を思い出したのです。夫に話す、君がやりたいなら応援するよって「言われて」

入隊して半年が経つが、実際に地域に住んでみると分かることがあるようだ。

「この半年間は、通いで山いき隊の活動をやっていました。朝にこまめに来てから、住民の方の手伝いやイベントの手伝い。自宅に戻ってから、地域の方向性に行っている隊員通信の制作などの事務仕事。やはり、実際に住んでみると、地域の方と近い距離で接することができ、本当に必要なのが見えてきますね」

### 家族全員で山いき隊

良いことと言えば、自分だけではなく、子どもにも変化を与えられたことだ。

「以前は少しお散歩に行くにも常に車を気にしなければいけませんでしたが、子どもが自由に安心して遊べる場所が多く、そういう心配が減りました。色々木や花があり、虫もいて、普段の散歩道

にも発見が多く、子どもたちは外に出るのを楽しみにしています。地域の方からは、周りに子どもが少ないこともあって子どもの声が聞こえないと噂されています。散歩に行くとき近所の方が声をかけてくれるので子どもたちにとっても刺激が多いようです」

子どもが自然の中で楽しそうにしている姿を見れば、この選択は間違っていないと思うそうです。

「最近子どもと味噌づくりや、畑づくりを始めました。せっかく良い環境にいるので、自然の中でさまざまな体験を通して気づきを促してほしいと願っています。子どもにも自然体験をさせたいと考える親は多いと思いますが、忙しい日々を送る共働き世代はその機会を自分で提供するのには難しいことです。中山間地域の方にはそれらの魅力を伝えられるような発信や、実際に一緒に体験できるようなつながりを持つたらと思っています」

### 山間部の学校に 外国人の英語を

「私ならではの活動ですが、バックパッカーの経験から海外に友人が沢山います。インターネットで世界中の方とも繋がっています。こういったことを情報の発信だけではなく、子ども達の経験値を増やすために活用できないかと思っています。例えば、自宅でもホームステイを受け入れて、近所

の方と交流してもらい、外国人には日本の自然の魅力を伝え、子どもも含め地域の方々はグローバルな経験をしたいと思っています。また、得意な語学力を生かして、海外から頼まれた電子メールや手紙などを翻訳するお手伝いを始め、地域の方が抱える困りごとの解決にも貢献できないかと思っています」

小学校の英語教育必修の前に、低学年から英語に触れる子どもが増えることは悪いことではな。

今、毎日を手廻生きているという皆さん、会社勤めの時とは「時短、効率化」が考えこまなかつたそうです。

毎日同じ人と会い、毎日同じ仕事をし、家に帰るとい生活から、毎日違う人と関わり、新しい「暮らし」を考える中で気がついたこと、母として気がついたことを発信していくことを考えている。

### TENRYU LIFE

天竜地域は広く、それぞれのエリアによって雰囲気は違いますが、都市部に比べて不便な面があるからこそ、コミュニティの中で声を掛け合って助け合う温かさがあちこちでみられます。都市部からも比較的近いので、都市部の生活と田舎の生活の中間の間立できると思います。



家から歩いていける距離にある、天竜川沿いの堤防。散歩している人も多く、きれいな落ち薪く場所



東京で開催されたマルシェの様子



1. 町外の人を対象に、佐久間の資源をいかした「竹の万華鏡講座」を実施  
2. 地域のイベントのお手伝い。(ゆるキャラ「さくまる」の右が金田隊員)



## 「物語がある場所」で 次の物語をつむぎたい



## 「佐久間地域」金田鈴音

佐久間に  
Uターンした大学生

「J坂飯田線 中郷天竜駅南にある施設 通称「袖(そで)の里」観光協会や地元有志団体の活動拠点となっており、山いき隊のメンバーもここにいます。入隊8カ月の金田鈴音さんは浜松市中区にある大学の4年生です。」

「私はこの佐久間町の生まれで、高校までずっとここにいました。高校時代の思い出は、家と学校の往復、帰りに駅のベンチで友達とおしゃべりして1日が終わる、カフェもコンビニもない、書店もない。当時はそんな佐久間から早く出たかったです。」

同じ浜松市内ではあるが、50キロ以上も離れた市街地にある静岡文化芸術大学に進学、図書館司書になることが決まっていた。アルバイトして、サークルに入っていた彼女が、1年生から中山間地域を研究する名を「地域社会学」を学ぶこと。

「君、佐久間出身なら、ぜひ来なよ」と先生に誘われて、いつの間にか佐久間に通うようになっていました。山でフィールドワークをやっている時間が多くなると、もともと中山間地域について学びたいという気持ちが高まってきました。」

高校生の自分と重ねれば、若者の本質が見えてくる

入隊から半年が過ぎた現在の活動は、山いき隊の先輩隊員の手伝いをはじめ、地域のNPO法人や観光協会、高齢者食事サロン等に顔を出し、佐久間に暮らす人や地域を「知る」こと。18年間も



### PROFILE

金田鈴音(かなたすずね)さん  
浜松市天竜区佐久間町出身。  
2022年7月から山いき隊に着任。  
静岡文化芸術大学 文化政策学科で  
地域社会学を専攻。

SAKUMA  
SUZUNE KANATA

過)してきた佐久間のことを知らなすぎたという。袖の里で多くの地元の方と話をしたことが、彼女の活動に新たな目標を見出した。

「私の後輩でもある佐久間の中学生や高校生が、様々な年代の人と交流できる場所を作りたいと考えています。つまり「たまり場」です。私がそうだったように、この佐久間では、家と学校の往復で、毎日会う人は友達と家族だけで、新しい人と出会うことは滅多にありません。それでは考え方が偏っていることもあると思います。」

地元、高校では他地域の若者とインターネットを活用して交流する取り組みを行っているが、彼女がやりたいことは、同じ佐久間の人同士で交流できる場所を作る事だ。

「思春期の若者にありますが、おとなしくて受け身、自分から発信することに苦手意識があります。週でも先生でも友だちでもない地元の人と、悩みを打ち明けたら、将来の夢を「そり聞いてもらえる場所が必要だ」と思っています。」

地域社会学では集落を駆出した家族との関係を持ち続けることが必要なことだと学び、研究してきた金田さん。先生ではない第三者の大人が、中学生高校生とつながりを持っていることが、魅力ある地域と若者を育てる言われている。佐久間



町外の人に佐久間を案内  
高校生・大学生との交流会として五平餅づくりの企画

「暮らす若者はいつか都会と撞れ佐久間を離れるかもしれない。だが、年に度でも佐久間に戻ってきてほしい、他の地域に行っても、佐久間を思い出してほしい。そしていつかは佐久間に戻ってきてくれたらいい。」

白らの経験から、そり願う彼女の実践活動がこれから始まる。

### SAKUMA LIFE

佐久間って、自然がとっても近いんです。ほかの地域と比べ、山と川の距離が狭くてその間に集落がある感じ。鮎や山梨など自然のものが暮らしに根付いています。だけど、JR飯田線は通って、最近では三遠南信自動車道が開通してアクセスしやすくなりました。田舎だけど行きやすい、これからの楽しみな地域です。



金田さんのお気に入りの場所、大河峡(おおほらきょう)



飯田線写真館は町内外からの協力で開催できた思い出のイベント



「飯田線写真館」は、町内外からの協力で開催できた思い出のイベント。展示された写真は、飯田線沿線の風景や人々の生活の様子を捉えたもので、多くの人々が興味を持って見ている。また、写真館の運営には、地元の写真愛好家やボランティアの協力もあって、とても充実している。今後も、飯田線沿線の魅力を伝えるために、写真館の運営を続けていきたいと考えている。

「飯田線写真館」は、町内外からの協力で開催できた思い出のイベント。展示された写真は、飯田線沿線の風景や人々の生活の様子を捉えたもので、多くの人々が興味を持って見ている。また、写真館の運営には、地元の写真愛好家やボランティアの協力もあって、とても充実している。今後も、飯田線沿線の魅力を伝えるために、写真館の運営を続けていきたいと考えている。

Hanamiya YAMAIKI MISAKUBO AREA



MISAKUBO LIFE

動物とよく遭いますよ！鹿・猪・狸・イタチ…道をあけてくれないです(笑)。動物達にとって、ここは自分達の棲家。我々人間が生活している場所に動物が暮らしているのではなく、彼らの暮らしの場所に我々人間が生活しているというような感じなんです。

水窪地域 山崎 洸一

MISAKUBO  
KOUICHI YAMAZAKI

特技を生かした取り組みで  
地域との交流を

PROFILE

山崎洸一(やまざきこういち)さん  
千葉県出身。  
2021年6月から山いき隊に兼任。  
趣味はカメラ撮影。



水窪今昔写真集  
MISAKUBO KYAKU PHOTO ALBUM



「水窪今昔写真集」は制作に1年をかけた超大作

と迷う日々が続きました。半年ほどは毎日、お手伝いの日が続き、今となれば着任してからしばらくの期間もつたいなかったと思います」

特技が活動に生きる

そんな中、特技であるカメラを活用し取り組みを見ける。水窪の昔と今をページの上下に配置し、比較できます。現在の景色を当時と同じ角度から撮影するのは結構大変でした。住民が多く、賑わっていた頃の商店街、今は無い公共施設の跡、山や川も大きく形を変えています。回覧版で写真を提供してほしいとお願ひし、年配の方に当時のお話を聞きに行き、コミュニケーションを取ることもできました。最初は隊員通信のコーナーで地元の方にはごり楽しんでもらえたら良いなと思っていましたが、良い写真が沢山集まってきたので、じゃあ写真集にしようと考え、クラウドファンディングで資金を集めました。地元の方を賛同していただいた方に配布しています。

また、写真という点では同じくかもしれませんが、無人駅の1R水窪駅が寂しいから、何かできないかと駅を毎日利用する方から言われた事がきっかけで、駅の構内をお借りして飯田線写真館という展示をしました。昔から通って現代に至るま

で、1R飯田線の歴史がわかるようになります。写真は地元の方だけでなく、水窪に電車や訪れる方、鉄道ファンの方にも協力していただき、大変多くの数が集まり、実際に展示できたのは全体の四分のくらいでした。写真以外の貴重な資料もお借りでき、見たいな事もあったと思います。地元の小中学生も喜んで来てくれました。車の移動がメインの水窪は、道路の凍結などにより冬場は訪問者数が減少してしまっています。交通手段に電車を利用する方がけになってもうたのは嬉しいですね」

「3年間の集大成にならないかと思えていたことがあり、それはもう一度写真集を出したという事です。今度は無料配布ではなく、販売し印刷費の回収を収益化できるようなことを試してみたいと考えています。『前回は無料だったのに今度はお金取るの？』って思われるかもしれませんが、山いき隊はお手伝いさんというイメージだけで終わるのではなく、卒業後にその地域に関わっていくこともあると思うので、全てボランティアで全て無償というスタンスでは、長続きしないと思います。これは、自身の為というより今後の山いき隊になる後進の為に、模範になれればという考えからです。また、さらに写真についてですが、僕がここにいる間に、写真

の整理をした、と覚えていきます。今昔写真集を作っている時に気がつきました、僕がこんなに美しい四季の景色があった、昔からの写真がたまたまあるのに、使おうと思っただけにはバラバラ。整理さえしてあれば、例えばマスのミの方に水窪の桜の頃の写真を貸してほしいと依頼をいただける、すぐに採り出せるような、そんなアーカイブを作るとができれば、水窪PRの助にもなるとも考えています」

# TATSUYAMA

DAIKI HASEYAMA  
CHIHARU SUZUKI



趣味のテントサウナで enquiry



長谷山さんがレイアウトした  
コミュニティスペース



TATSUYAMA CHANNEL

芋煮会の様子。龍山に「関係人口」を増やす  
きっかけにしたいと2人は語る



Hamamatsu YAMAIKI | TATSUYAMA AREA

## TATSUYAMA LIFE -HASEYAMA-

広大な天竜美林の中央を、エメラルドに輝く天竜川が流れている。自然豊かな町。学校がなくなってしまった若者は少ないけれど、元気なおいちはちゃんおばあちゃんたちの笑い声は絶えない。のどかであたたかな素敵な場所です。

龍山地域を担当する長谷山大崎さんと、鈴木千陽さん。2人が住む龍山地域は9年前に小学校が閉校となり、若者や子育て世代が少なく、人口は480人、平均年齢は70歳だ。そんな地域にいる20代の山いき隊2人の工夫が興味深い。

## 龍山地域 長谷山大崎



でも、人は温かい

夏はど暑い！冬はど寒い

### PROFILE

長谷山大崎(すずきだいき)さん 浜松市東区出身。  
2021年4月から山いき隊に兼任。山いき隊の募集を締め切りの2日前に知り、即応募。好きな言葉は「なんとかなるさ」。

### PROFILE

鈴木千陽(すずきはる)さん 埼玉県新座市出身。  
2021年4月から山いき隊に兼任。学生の頃から田舎暮らしに興味があり、大学を卒業後山いき隊に。

龍山で、元々龍山に暮らしていた人や、田舎に興味がある人に来てもらえるようなイベントの開催。住むや暮らすまではいいかないとしても何かあれば遊びに来たくなるような魅力発信。例えば、農作物の収穫時期には集まって手伝いに来るといいうイベントです。つまり、「関係人口」を増やすことを目的にした任意団体を立ち上げたのです。それが、龍山未来創造プロジェクト、通称「たふろです」。

任期の始まりが同じ2人は残すところ1年で揃って卒業する。この団体が機能して、自分たちも含め龍山が好きだから何かしたい」という人の輪が広がっている。今の思いや活動が凝っていくと考えると、

このままで良いのだろうか？と考えるようになって。一度きりの人生、もっと楽しみたい。変わったことをしてみたいと思ひ応募したのが、山いき隊でした。

山いき隊の活動が2年経ち、地域の方との関わりやその輪の中に、自分の存在感を感じることができ、この人生の選択は間違っていないかと語る。

鈴木さん「私は埼玉県新座市出身で、千葉県の大学を卒業後に、新卒で山いき隊に入隊しました。祖母が長野県の山間部、祖父が沼津市の出身で、ちよつと中間地点辺りで、かた山で生活できるといふことを避けた理由です。社会経験は少なくても、様々な分野の活動ができるのが山いき隊の魅力です」。

大卒卒業時がコロナ禍で希望していた就職も手く進まない中、それならば合しとてささいな経験が積み重なると考えた。2人の日常は、年配の方の安全確認を目的としたサロンへの顔出しや、地域の団体が運営する物産店「ドラゴンママ」での手伝いなど、時には肉休労働を伴う味噌作りや刺身作りにも及ぶ。この地域の茶業の手入れや

## TATSUYAMA LIFE -SUZUKI-

龍山には都会にはないものがあります。この地で工夫して暮らしている地域の人たちこそが龍山の魅力だと感じます。年配の方にとにかく私たちがいることを喜んでいただけます。もう孫みたいな可愛がっていただき、幸せな毎日です。

寺尾地域から天竜川を眺める(長谷山さんお気に入りの景色)



芸術作品等々を展示するイベントで、300人以上の方に来ていただきました。旧学校の使用許可やイベント補助金の申請、運営に協力いただいた常葉大学の先生や学生さんとのオンライン打ち合わせなど準備は大変で、半年くらいかかりましたが、皆さんは喜んでいただけるととても嬉しかったです」。

「龍山ぼちゃん」開催後、関わりが深くなり、イベントに参加した人を誘い、交流イベント「芋煮会」を開催した。その人は季節ごと「関係人口」の増加の為に2人には、まだまだやりたい事が沢山あるそうだが、直に地域の方に求められている事は、この地域に若い人がいるということだと自覚している。若い2人が楽しみなながら生懸命に頑張っている姿を見れば、それだけで地域の人が元気になるはずだ。

長谷山さん「ますます高齢化が進む龍山未来創造プロジェクトを発足

取組にも若い2人は欠かせない。長谷山さんは長年使用されていた空きスペースを活用し、ギャラリーやワークショップスペース相相談を行うコミュニティスペースなどにできないか取り組んでいる。鈴木さんは大学で学んだデザイン技術で、イベントのチラシ制作やマクラメ編みで作るタペストリー教室を開催し、地域の方との関わりを持っている。そんな2人と地域の方が昨年、団体を立ち上げた。

